

## 子安通三丁目自主防災会

編集部

今回の調査季報の編集にあたり、神奈川県では「子安通三丁目の取り組みについて紹介したい」ということで、どんなことをやっているのか区に話を聞きにいった。「とにかく地域が頑張っている。」ということだった。

では、なぜそもそもこの地域では、そんなに活動がさかんになったのか、その秘訣を直接聞いてみたい、ということで、区の担当係長と一緒に子安通三丁目におじゃました。

迎えてくださったのは、自治会長の伊東さん、自治会自主防災会広報部長の増田さん、同じく自主防災会事務局長の宮森さん、の三人の方である。

「そもそも行政が地域にくるのはどのくらい後なのかわからないですよ。」会長である伊東さんは、そう話をはじめられた。その間を地域でどう対応できるか、が問題だ。会長になる以前から自治会にかかわってこられた伊東さんには、自治会についての危機感があった。役員が高齢化し（高齢化、というのは、70代、80代のことである。）、新しく来た人や若い人の意見をどう取り入れて、実行するか。これを何とかしないと、地域での防災対策は進まない。

一方増田さんは、防災について関心を持ち、勉強するなかで、知れば知るほど地域での防災の必要性を強く感じるようになり、自治会にも相談して自主防災組織を立ち上げることにした。そこで、いまは地域で活動していないが、これから戻ってくるだろう「団塊の世代」をどう取り入れられるか、と考

た。それには今の自治会組織では入りにくい。そこで、自治会の役職とは別の団体をつくろう、と思いついたのである。

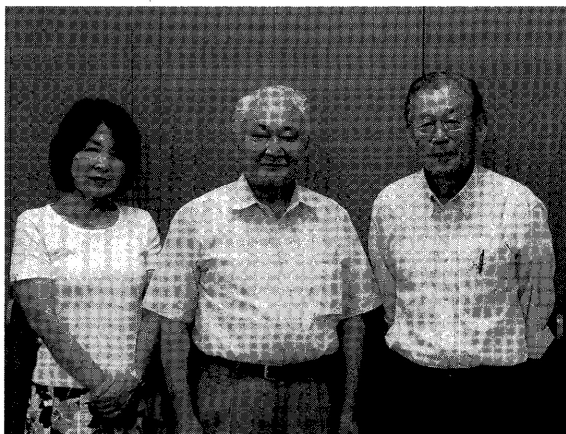
増田さんに誘われて活動をはじめたのが、宮森さんである。宮森さんは子安通三丁目に住んでいて、自治会に加入はしていたが、役員活動とは無縁の生活を送っていた。それを増田さんから声をかけられ、自主防災組織「災害対策室」（現在は「自主防災会」）の事務局長をひきうけることになった。今では町内会の会計まで担っている。

お二人にも、自治会活動を有意義なものにしたい、という意識は共通している。この地域には、2千数百人が住んでいるが、昔からここにいる人は2割ぐらいで、あとは最近できたマンションの住民だそうである。新住民が増えるなかで、地域のつながりが薄くなり、町会の果たす役割は何なのか、町会の存在意義が問われているのである。

さらに増田さんは子育て支援活動にも関わっており、活動を通じて若い人にも声掛けされている。「はじめたときから次の世代を育てることを考えないといけない」と増田さんはいわれる。でないと組織は高齢化し、活動が続かない。まさにそのとおりで、その場で終わり、ではなく、継続する活動としての秘訣がここにある。また、宮森さんは、「参加したい、という内容にしないと続かない」ともいわれた。ご自身の経験もふまえての、実感なのだろうと思う。

そしてこのような前向きな考えを、伊東さんを中心に、自治会が柔軟に受け止め、さらに活動が広がる、といういい循環を生み出している。伊東さんがおっしゃるには、自治会の活動は、無理をさせない、命令しない、ことが大事で、今子育てで忙しければ、単なる「参加」でもいい、と考えている、とのことだった。

活動の広がりについていくつかご紹介すると、たとえば、自治会の自主イベントである「防災フェア」では、「命のハンカチ」事業のPRに、着ぐるみが登場した。若いお母さん達が筋づくり、劇の形で「命のハンカチ」を紹介したのである。「防災訓練」



左から増田さん、伊東さん、宮森さん

というと、あまり「楽しい」というイメージはないと思うが、こんな工夫で子どもも楽しく参加できるイベントになる。「命のハンカチ」は発想そのものも素晴らしいが、これを定着するには、と真剣に考える中で、さらなるアイデアが生まれてくる。昨年は盆踊りでもPRを行った。こんなところで？と思われる方もあるかもしれないが、あらゆる機会を使って意識の中に定着しないと意味がない、ということだ。確かに、そこまでいかなければ、いざというときの本当の行動には結びつかないだろう。

みんなが意識を持つ、という視点からもう一つ例をあげると、「パール」を地区長にあずけることにする、という話があった。「パール」は、倒壊した建物の中に閉じこめられた人を助けるための道具だが、これを地区長にあずければ、みんなにもある場所がわかりやすいし、地区長の心構えにもなる、ということだ。

各地区長には、要援護者の確認も進めてもらって

いる。誰がその安否を確認するかも含め、やっていきたいという。以前災害対策用に「井戸」があるかどうか、地域の確認にまわったとき、一戸建てに住む高齢者などには、「出入り口に荷物がたくさんあって、危ないですよ」というような話をしながら回ったが、小さいアパートで一人暮らしをしている場合などは、なかなか接点がなく、難しいようだ。

要援護者については、把握するだけでなく、助ける人が必要で、その発想から今度は、近隣の企業や、学校との連携もはじめている。企業の体育館を避難所として確保してもらったり、いざというときに若い人の力を借りたり、「地域力」を高める取り組みを次々と展開している。

企業との連携の話では、区役所がこの地域に関わり、リーフレットができたこともよかったそうだ。このリーフレットをもっていくことで、企業と話がしやすくなった、ということである。また、区役所が関わることで他の町内会との交流ができた（これが意外に今までなかったとのこと）、「防災フェア」のためにマンションの公開空地进行を借りる手続きを教えてもらったり、アイデアを実現するための「一押し」が有り難い、という。まさに「地域ニーズにあわせた支援」が行われているということだろう。

うかがっていると、次から次へと、なるほどと思うお話ができて、納得してしまうのだが、ではなぜ、このように次々と新しい発想と展開がでてきたのか。自分たちの地域は自分たちで守る、という意識と、それを実行する行動力がある、ということなのだが、その根底にあるのは、自分たちが住む地域に対する真剣さ、かもしれない。

伊東さんとしては、「防災」はひとつのきっかけで、次は「環境」に取り組みたいそうで、まだまだやることはたくさんありそうである。

最後になりましたが、伊東さん、増田さん、宮森さん、暑い中、お忙しい中お集まりいただき、予定時間を大幅にオーバーしてお話くださりまして、本当にありがとうございました。子安通三丁目の活動展開の秘訣の一端でも、お伝えできていれば幸いです。

## 力を合わせて災害に備える

### 子安通三丁目災害対策室の歩み

平成16年に策定された「神奈川区地域福祉保健計画」は、「誰もが住み続けたい神奈川区」を目指しています。その一環として、一昨年自主防災組織を立ち上げた、子安通三丁目自治会をモデル地区とし、防災の視点から見まちづくりと、高齢者や障害者等災害時に支援が必要な方への対策を伝える「災害時にあける要援護者等地域サポート事業」を行いました。

ここに、モデル地区の活動のご紹介と、その中から見えてきた地域防災の課題性をご報告します。

#### 1 子安通三丁目災害対策室とは

子安通三丁目は、鶴見区に隣接し海に面した、景観に美しい地区です。国道や鉄道が町を横断し、消防車が入れない狭い道が多い地域で、マンションが立ち並ぶ地域があります。

「災害が起きたらこの地区は・・・」そんな危機感から、平成17年9月、1人の主婦の声かけで、「子安通三丁目災害対策室」もたらされた人々で立ち上げました。

一つ一つの課題に取り組みしていた、これまでの歩みをご紹介します。

#### これまでの歩み

平成17年 9月 協力者4名を確保して、町内会長へ取り組みを始めたい旨相談。  
了承を受け、自治会長を委員長として「子安通三丁目災害対策室」設立。  
町内の井戸調査を始め、防災通帳1号を発行。

10月 海老原区日根山の自主防災組織の取り組みを参考に、「防災ウォーク」開催。  
小高の中、電子書を読む会を参加。

12月 町内の防災意識調査を実施(1分所)。金やヤシロ、ジャッキーやつるはしなどは、四角板で呼びかけ、住居による着弾により整備。

平成18年 4月 町内会館で「防災講座会」開催、70名参加。

5月 「防災フェア」開催。参加350名参加。\*防災ボランティア登録 40名。

7月 自治会役員も交え、避難について話し合い。自治会の組織の1つに位置づけ。  
派火災、情報伝達など3つの班体制とする。

9月 「防災訓練」開催。小学生含む34名参加。

11月 「応急手当講習会」開催。81名参加。

【災害が起きたら、何を待ってどこへ逃げよう?】多くの人はそう考えます。誰も、危険と「自分は助かる」と思っているのです。でも・・・

【ちょっと待て、そもそも自分は果たして助かるのか?】  
このまちはどうなるのか?

【高齢者や障害者、乳幼児など、災害時に支援が必要な方に対して何が出来るか?】を考えたとき、実はその危険の備えが重要なことがわかりました。

リーフレット